



山里の春祭り

気温が低いためか、やつとここにきて桜が開き始めた。山梨市牧丘町にある室伏なる集落では四月の第二日曜日に祭りが催される。温暖化で桜の開花が早くなり、桜が終わってからの祭りとなることが多いが、今年は久しぶりに桜が咲く中での祭りとなった▼集落の入り口には日の丸の旗が二本を交差させて門のように立つ。その左奥には白地と赤地の長い布を対にした旗を立てられ、ゆるやかな風に旗が優雅に揺れる。折から開いた桜の花々が、日の丸と紅白の旗を引きたてて、華やかな雰囲気醸し出している▼集落の奥山にある日吉山王神社で一連の儀式は執り行われる。ちょうど昼過ぎに花火が打ち上げられ、お神輿(みこし)と山車(だし)が繰り出す。集落入り口の、日の丸と旗を立てられたところまで、お神輿が先導し、しばらくの間をおいて、山車と一緒に子どもたちが太鼓でリズムを刻み笛を吹きながら歩く。激しいお神輿とは打って変わって、太鼓と笛による比較的単調ながらも、品のいい、かつ浮き立つような調べが奏でられ、山車と子どもの一行情はゆつくり、かつ整然と続く▼集落もこの日ばかりは人が行き交い、どの家でも人が集まってにぎやかな食事となる。しかしながら祭りが終われば、子や孫の多くは山梨市の中心部や東京等に帰ってしまい、普段のひと気の少ない集落に戻る。年々、祭りの担い手も減少する一方だ。祭りが終わった後の気持ちの落差は年々大きくなると同時に、この古くからの祭りがいつまで続くのか、あらためて不安が頭をもたげてもくる。

(土着菌)